airiti

論村上春樹作品中「性少數(sexual minority)」的問題—以《人造衛星情人》為例

王嘉臨

淡江大學日本語文學系副教授

摘要

在當代日本文學中，村上春樹可謂是對性別議題敏感的作家。從1987年發表之《挪威的森林》中漂亮聰明的同性戀少女至2013年發表之《沒有色彩的多崎作和他的巡禮之年》中的赤松慶，村上隨著不同時期所取的題材，將性少數的議題呈現於作品中，描寫出多面向的性少數者樣貌。本論文以1999年所發表之《人造衛星情人》為對象，以性別意識為論述中心重新探究村上作品中「性少數」的問題。

考察結果得知:1.在文本中女性的同性情慾並非天生自然而是後天變異，這顯示了性別主流／性別少數身份的解構及翻轉，勾勒出性別身分認同中二分框架的僵化箝制。2. 情慾的建構包含生理性別及社會性別之多種因素的交互作用。3.小說中小堇及妙妙之間的女同性戀性愛之所以失敗除彰顯了兩人對性愛認知的差異，更進一步對於差異性他者的結合提出懷疑，反思人際關係中最根源的問題。《人造衛星情人》透過女同性情慾的描寫，呈現出女同性戀關係的混沌。

【關鍵詞】

性少數、《人造衛星情人》、性別意識、性別主流／性別少數、女同性戀關係

airiti

Exploring "Sexual Minority" in Haruki Murakami's Works - Focusing on *Sputnik Sweetheart*

Wang, Chia-Lin
Associate Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

In modern Japanese literature, Haruki Murakami is a writer who is sensitive to gender issues. From *Norwegian Wood* (1987) to *Colorless Tsukuru Tazaki and His Years of Pilgrimage* (2013), Murakami presents the issues of sexual minorities in his works with themes across different times. This thesis re-explores the problem of “sexual minority” in Murakami’s works from the perspective of sexual gender consciousness based on *Sputnik Sweetheart* (1999).

The results show that: 1. Women's homosexual lust is not born natural but acquired variation, which shows the deconstruction and flipping of sexual majority/minority identity, and the boundary of the dichotomous framework in gender identity. 2. The construction of lust involves the interaction of multiple factors of physical gender and gender. 3. The failure of sexual love between Sumire and Miu, besides the demonstration of differences between their cognition towards sex, it further raises doubts regarding the combination of self and other, reflecting the most fundamental problems in interpersonal relationship.

【Keywords】

sexual minority, *Sputnik Sweetheart*, sexual gender,
sexual majority/minority, lesbianism

airiti

村上作品における性的マイノリティについての意識
―『スプートニクの恋人』を中心に―

王嘉臨
淡江大學日本語文學系副教授

要旨

村上の作品を通観すると 1987 年に出版された『ノルウェイの森』におけるレズビアンと称される少女から、2013 に発表された『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』における男性に欲望を感じるつくるの同級生アカにいたるまで、性的マイノリティの登場人物が多く登場し、性的マイノリティが一つの問題軸として村上作品に取り上げられている。本稿では１９９９年に発表された『スプートニクの恋人』を対象に作品に描かれる女性同性愛について検討することによって、村上作品における性的マイノリティの問題を明らかにする。

考察の結果、『スプートニクの恋人』では、「流れ」としての性的マイノリティ、女性の同性愛欲望が呈示出され、単にセクシュアリティを両端に区別し、規定する従来のマジョリティとマイノリティの境界線の曖昧さが示されている。また、性的指向が単に身体問題へと還元されるのではなく、周囲の環境、現実社会における打算など様々な要因が介在していることが明らかとなった。そして、結末におけるすみれとミュウとの性交の頓挫は異質同士の結びつきとい根源的な問いを喚起させ、『スプートニクの恋人』は女性同性愛関係の混沌を示している。

【キーワード】

性的マイノリティ、『スプートニクの恋人』、セクシャルジェンダー、マジョリティ/マイノリティ、レズビアニズム

airiti

村上作品における性的マイノリティについての意識
―『スプートニクの恋人』を中心に―

王嘉臨
淡江大學日本語文學系副教授

1. はじめに

性的マイノリティ[1]について、村上春樹は川上未映子のインタビューで次のように述べている。

> リアリティというのは、特徴的なものというよりは、総合的なものです。そしてまたリアリティというのは、どんどん推移していくものです。「これはこうだ」と簡単に固定して決めつけられるものじゃない。そういう意味合いにおいて、ジェンダーというものに対して、僕はすごく興味があるんです。ゲイについても、レズビアンについても、性同一性障害についても。そういう具合にジェンダーには、その中間的なジェンダーを含んだグラデーションがあります。それが状況によって自在に入れ替わっていく。僕の中にも女性的なファクターがあります。どの男性の中にだってそれはあると思うだけど、そういうファクターをフルに活用することによって、小説は活性化すると僕は思っています[2]。

村上はここで男／女二分の狭間にあった様々な人々への関心を示

[1] 羽入雪子「性的マイノリティ」では、性的マイノリティを「「性的少数者」という意味であり、「マジョリティ（多数者)」に対する言葉である」とし、一般的には「生物学的性と性自認に違和のある人たち、恋愛や性行動などの性的指向が異性愛者でない人たち、生物学的性が男女二分に馴染まない人たちの総称として用いられる」と指摘している（羽入雪子（2017)「性的マイノリティ」『産業文化研究』第２６号)。本稿も基本的にこの＜性的マイノリティ＞の考え方に基づく。

[2] 川上未映子（2017)『みみずくは黄昏に飛びたつ』新潮社 P30

airiti

している。興味深いのは村上が主張した状況によって自在に変化する「中間的なジェンダーを含んだグラデーション」という点である。つまり、性的マイノリティは固定したものではなく、性そのものの多様性として提示されているのである。実際、村上は作家活動の当初から性的マイノリティについて極めて意識的だったのである。村上の作品を通観すると 1987 年に出版された『ノルウェイの森』におけるレズビアンと称される少女から、2013 年に発表された『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』における男性に欲望を感じる、つくるの同級生アカにいたるまで、性的マイノリティの登場人物が多く登場し、性的マイノリティが一つの問題軸として村上作品に取り上げられている。特に女性の同性愛については、かなり興味深い描かれ方をしていることに気付かされる。例えば、渡辺みえ子は『語り得ぬもの：村上春樹の女性レズビアン表象』で、村上春樹の『ノルウェイの森』と『スプートニクの恋人』を扱い、村上作品におけるレズビアンの他者性について着目し、次のように述べている。

> 父権社会のなかで私的領域に閉じ込められてきた女が、他の女と結ぶ性愛を含めての関係は二重に不可視化されている。『ノルウェイの森』というテキストの中に織り込まれた不可視の他者としての「あの子」を浮かび上がらせることは、このベストセラー小説の＜生の中にある死＞の意味を解くことでもあった。（中略）周縁に追いやられたものが中心を支える仕組みを、もっとも見えなくさせられているものの位置から、沈黙の声を聞き取ることは、時代が恐怖してきたものを見ることでもあろう[3]。

[3] 渡辺みえこ（2009）『語り得ぬもの：村上春樹の女性表象』御茶の水書房 P106

airiti

渡辺は村上作品におけるレズビアンが「不可解な闇」として描かれ、不可視化されているという。そして、このような観点から考えると、１９９９年に発表された『スプートニクの恋人』という作品は意味深い重要な作品であろう。そこでは手紙におけるすみれの言葉を通して、これまで不可視であるため、排除されてきた女性同性愛者の生が自己呈示され、可視化されている。以上を踏まえて、本稿では『スプートニクの恋人』を対象にし、女性同性愛者の自己呈示という特殊なエクリチュールがいかなる意味を示しうるのかを考察する。それによって、しばしば「異性愛中心主義」と批判され 、主流的な男性視点に偏ると言われる村上春樹の作品において、こうした性的マイノリティを描く小説の可能性について考えていきたい。

2. 性の越境―レズビアンの身体

『スプートニクの恋人』は、次の一節から始まる。

> ２２歳の春にすみれは生まれて初めて恋に落ちた。広大な平原をまっすぐ突き進む竜巻のような激しい恋だった。(中略) 恋に落ちた相手はすみれより１７歳年上で、結婚していた。さらにつけ加えるなら、女性だった。それがすべてのものごとが始まった場所であり、(ほとんど) すべてのものごとが終わった場所だった(P239)。

物語は、すみれが従妹の披露宴で十七歳年上の在日韓国人二世の女性ミュウと出会い､「広大な平原をまっすぐ突き進む竜巻のような激しい恋」をすることから始まる。これまで男性に恋愛感情を抱くことがなく、「性欲というものがよく理解できない（P246)」すみれは何故突如ミュウという女性に性欲を感じたのか自分自身にも分からず、ミュウへの思いやエロティックな関心が「美しく洗練された年上の女性に対する憧れ（P50)」なのか「それはただの「憧れ」とはちょっと違うもの（P50)」なのか戸惑う。

airiti

堀江有里は「レズビアンは、「女」であり、「同性愛者」であるという属性が交差するところに存在する。異性愛主義と男性中心主義という二つの規範が横たわる社会において、その身体は、ときに好奇のまなざしにさらされ、スティグマを付与されてきた。また同時に、「存在しないもの」として認識の埒外に置かれてきた」[4]と述べ、異性愛主義が浸透した社会の中で女性の同性愛的欲望が認知されにくいという社会的事実のため不可視化ないしは差別されている、と指摘している。では、『スプートニクの恋人』では女性の同性愛的欲望はどのように表象されているのか。

ミュウへの特別な感情をめぐって、すみれは「ぼく」と次のようなやり取りをする場面がある。

> ぼくは言った、「ミュウにたいして君が感じているのが性欲であることは間違いないんだね？」
>
> 「１００パーセント間違いないと思う」とすみれは言った。「彼女の前に出ると、その耳の中の骨がからからと音を立てるの。薄い貝殻でできた風鈴みたいに。そしてわたしは強く彼女に抱きしめられたいと望む。すべてをまかせてしまいたいと思う。もしそれが性欲じゃないと言うなら、わたしの血管を流れているのはトマト・ジュースよ（P78）。（引用部分の下線は引用者。以下同じ。）

すみれはミュウに対する「性欲」を「その耳の中の骨がからからと音を立てるの。薄い貝殻でできた風鈴みたいに」「もしそれが性欲じゃないと言うなら、わたしの血管を流れているのはトマト・ジュースよ」という表現で動かしがたい感覚の事象や「血」の比喩を用いて「性欲」を説明することで、「血」と「性欲」の換喩性を通

[4] 堀江有里（2008）「引き裂かれる自己／切り裂かれる身体―レズビアンへのまなざしをめぐって」金井淑子編『身体とアイデンティティ・トラブル―ジェンダー／セックスの二元論を超えて』明石書店 P299

airiti

して、「性欲」を説明している。したがって、その性欲は厳然として動かしがたい感覚や確固とした身体性として「血」と同義のものになるのである。そこには、一見セクシュアル・マジョリティと見える人物も、ある場面や状況においては容易にマイノリティとなり得る性的マジョリティとマイノリティの流動的なあり方が提示されている。

前述したように性別二元体制の下では女性の同性愛的欲望は、これまで「存在しないもの」として否認され、排除されてきた。これに対して、『スプートニクの恋人』では、「流れ」としての女性の同性愛的欲望が描き出され、単にセクシュアリティを二項対立的に区別し、規定する従来のマイノリティとマジョリティの境界線は薄らぎ、曖昧化されていくのである。だからこそ、何らかのきっかけで反転してもおかしくない。

3. ハイブリッドな欲望―「血」と「性欲」

以上、『スプートニクの恋人』に見られる性的マイノリティについて考察してきた。そして、『スプートニクの恋人』という作品が貴重であるのは、単に恋愛や性愛の問題だけでなく、その人物そのものに深く結びついているというハイブリッドな性のあり方が呈示されているからである。以下、この点について考えていきたい。

「ミュウ」に対する自分の性欲を「流れ」と意味づける「すみれ」は、「ミュウ」とのヨーロッパ旅行を「長い運命のとりあえずの帰結（P190)」と規定している。そして、ギリシャですみれはミュウの十四年前に体験した観覧車事件を聞いた後、若くして死んだ自分の実母の夢を見る。その夢については、「文章１」で次のように記されている。

> この夢を見たあとで、わたしはひとつ重大な決心をした。わたしのそれなりに勤勉なつるはしの先はようやく強固な岩塊を叩く、こつん。わたしはミュウに、わたしが何を求めているか

airiti

をはっきりと示そうと思う。このような宙ぶらりんな状態をいつまでも続けていくことはできない。どこかの気弱な床屋のように裏庭にしけた穴を掘って、「わたしはミュウを愛している！」とこっそり打ち明けているわけにはいかないのだ。そんなことを続けていたら、わたしは間断なく失われていくことだろう。すべての夜明けとすべての夕暮れが、わたしをひとかけらひとかけら奪っていくことだろう。そしてそのうちわたしという存在は流れに削り尽くされ、「なんにもなし」になってしまうことだろう（P205～206）。

ここでは「母の夢」とミュウへの愛とが併記されている。加藤典洋は人物間の関連性に着目し、「ミュウというのは、ギリシャ語でMのことです。Mといえば、マザー、メール、ムウテル、ママ。Pが父につながる頭文字であるように、母につながる頭文字です」と、ミュウが母と重なる存在であると述べ、「僕の推定が正しく、あの言葉（―すみれが最後にミュウに囁いた言葉）が「お母さん」なら、最後、すみれはいわば母なるものに拒絶されていることになります」[5]と指摘している[6]。

だが、ここで注意しておきたいのは、この「文章１」において喚起されたことはミュウ＝象徴的な母といった単一的な枠組にとどまらず、一方で母の死にまつわる「母親はまるで巨大な真空に向こう側から引っ張られるみたいに、穴の奥にひきずり込まれていった（P203）」と理不尽な力を持つ「向こう側」の存在も喚起され、強調

[5] 加藤典洋（2005）「行く者と行かれる者の連帯―村上春樹『スプートニクの恋人』」今井清人編『村上春樹スタディーズ２０００－２００４』若草書房 P137～138

[6] 一方、近藤裕子は＜父＞に着目し、「このリッチの理論を借りるなら、すみれのレズビアンも、父親（あるいは父権制）によってあらかじめ損なわれていた母性との原初的関係回復の働きとして説明できるのではないか」とミュウを追い求めることの必然性を指摘した。（近藤裕子（2008）「すみれへ／すみれから―父権とレズビアニズム」柘植光彦編『国文解釈と鑑賞別冊　村上春樹：テーマ・装置・キャラクター』至文堂 P219）

airiti

されているという点である。そして、引用箇所の後半に焦点を当てれば、こうした象徴的な意味を帯びている「向こう側」が、後半のすみれの叙述に「そしてそのうちわたしという存在は流れに削り尽くされ、「なんにもなし」になってしまうことだろう」と名前を与えている。この理不尽な力を持つ「向こう側」、「流れ」に対して、すみれは「わたしは既にあまりに多くの大事なものを明け渡してきた。わたしはこれ以上、彼らに何も与えたくない（P206）」と語る。つまり、理不尽な力を持つ「向こう側」、「流れ」に抗することで、自己改革を成し遂げることが可能となる。このように見ていくと、一見「母子の相互密着関係」[7]のように見えるミュウへの求愛は、理不尽な力を持つ「向こう側」、「流れ」に抗し、現実への自己投企として位置付けることが出来る。だからこそ、それは「もしミュウがわたしを受け入れなかったらどうする？そうしたらわたしは事実をあらためて呑み込むしかないだろう。「いいですか、人が撃たれたら、血は流れるものなんです」（P206）」と新たな生を奪回するのは血にまみれることとすみれに語られている。

実際、この作品では「流血（P198）」ということが頻繁に言及され、重要な意味を帯びている。例えば、冒頭で「ぼく」は「小説を書く」ことについて、すみれに次のように語っていた。

> 「小説を書くのも、それに似ている。骨をいっぱい集めてきてどんな立派な門を作っても、それだけでは生きた小説にはならない。物語というのはある意味では、この世のものではないんだ。本当の物語にはこっち側とあっち側を結びつけるための、呪術的な洗礼が必要とされる」
>
> （中略）
>
> 「そして温かい血が流されなくてはならない」（P24）

[7] 同前掲渡辺みえこ『語り得ぬもの：村上春樹の女性表象』P79

airiti

ここでは「本当の物語」には対立的な「こっち側」と「あっち側」を結ぶための「呪術的な洗礼」が要請されていることが示されている。そして、この「呪術的な洗礼」では「温かい血が流されなくてはならない」とあるように衝突が起き、血にまみれている。その意味で前述したミュウへの求愛の欲望も「こっち側」と「あっち側」を越境するための「呪術的な洗礼」であり、「本当の物語」の成立条件として考えることが可能だろう。

性的指向というのは「本人が欲望する性的対象選択のだいたいの傾向」[8]である。『スプートニクの恋人』では、性的指向が単に身体問題へと還元されるのではない。そこでは周囲の環境、現実社会における打算など様々な要因が介在している、異質性と多様性から成り立つバイブリッドな存在としての性的指向が示されている。

4. 『スプートニクの恋人』の到達点

黒岩裕市は現代文学における男性同性愛と女性同性愛表象の不対称性を指摘し、次のように述べている。

> 「『ざらざら』収録作品では、一人称の語り手で登場人物である女性が不意にほかの女性に「好き」という感情やエロティックな関心を抱いたとして、そのキャラクターが「レズビアン」と名乗る／呼ばれることなく、その関係性はやがては終わるものとして表象される傾向にある。その点で、「おかま」や「ゲイ」と名乗る／呼ばれる修三とは対照的である。(中略)だが同時に、あくまでもその関係性が終わることが前提になっているという点では、ヘテロセクシズムを維持する側面があることも否めない[9]。

[8] 伏見憲明（1996)「「同性愛」という劇場」岡本由希子編『特集　セクシュアリティ：書き変えられる性の境界』青土社 P223

[9] 黒岩裕市『ゲイの可視化を読む―現代文学に描かれる＜性の多様性＞？―』P86～87

airiti

確かにミュウとの情交の失敗は性愛をめぐる性器中心主義的性愛観、「ヘテロセクシズムを維持する側面がある」と言える。しかし忘れてはいけないことは、『スプートニクの恋人』ではミュウとの情交の失敗が性器性愛＝ヘテロセクシュアルの面に接近しつつも、それとは異なる方向へと向かっているということである。以下、作品の叙述に沿って、この問題について考察していきたい。

すみれとの性交について、ミュウは次のように語っている。

> 「わたしには同性愛の経験はなかったし、自分にそういう傾向があると考えたこともなかった。でももしすみれが真剣に求めているのなら、わたしはそれにこたえてもかまわないと思ったのよ。少なくとも嫌悪感みたいなものはなかった。すみれとなら、ということだけれど。だからすみれの指がわたしの身体を撫でまわしたり、彼女の舌がわたしの口の中に入ってきたときにも抵抗はしなかった。不思議な気持ちはしたけれど、それに慣れようと思った。だからわたしはなされるがままになっていたの。わたしはすみれのことが好きだったし、彼女がそれで幸福になれるのなら、なにをされてもかまわないと思っていた。でもいくらそう思っても、わたしの身体はわたしの心とはべつのところにいた。わかるでしょう？すみれに自分の身体をそんな風に大事に触れてもらえること自体は、ある部分ではうれしくさえあったの。でもわたしの心がどれだけそう感じても、わたしの身体は彼女を拒否していた。それはすみれを受け入れようとはしなかった。わたしの身体の中で興奮しているのは心臓と頭だけで、あとの部分は石のかたまりのようにかたく乾いていた。悲しいけれど、どうしようもないことだったのよ。もちろんすみれにもそれはわかった。すみれの身体は熱く火照って、柔らかく湿っていた。でもわたしはそれにこたえてあげられなかった（P169～170）。

airiti

すみれによって施される激しくそして切ない愛撫。しかし、女性間の性愛は新しい性関係を切り開くのではなく、「でもわたしの心がどれだけそう感じても、わたしの身体は彼女を拒否していた。それはすみれを受け入れようとはしなかった。私の身体の中で興奮しているのは心臓と頭だけで、あとの部分は石のかたまりのようにかたく乾いていた（P170）」とミュウに身体的快感を起こさず、苦痛の体験となっている。男ばかりでなく女を相手にしても、ミュウは性的反応を感じない。そして、「もしなにかわたしにできることがあるのなら、それをしてあげると言った。つまりわたしの指とか、口とかで、ということ。でも彼女の求めているのはそういうことではなかったし、それはわたしにもわかっていた（P170～171）」というミュウの言葉の背後には、性器中心主義的性愛観という考え方がうかがえる。

一方、この体験が十四年前に経験した観覧車事件と併記されていることに注目しておきたい。ミュウは十四年前の事件を機に「この世界の誰とも身体を交わらせることができない」と性交が不能となる。こうしたミュウはすみれの求愛に応えようと努めながらも、そのことでかえってすみれとの距離を意識せざるをえなくなるジレンマが示されている。そして、その結果として導かれていくのは、「わたしたちは素敵な旅の連れであったけれど、結局はそれぞれの軌道を描く孤独な金属の塊に過ぎなかった（P171）」という認識である。つまり、決定的な差異を持ちながら、人間同士がいかに繋がり得るかという関係性の根源的な問いを喚起させ、この性交は自他交渉の場として機能しているのである。

以上のように、『スプートニクの恋人』において、ミュウとの情交は性愛をめぐる性器中心主義的性愛観、ヘテロセクシュアルの面を持ちながらも、それを変形させ、関係性の問題という異なる方向へと向かっていることが分かる。だからこそ、「わたしはミュウを愛している。いうまでもなくこちら側のミュウを愛している。でもそれと同じくらい、あちら側にいるはずのミュウのことをも愛している。

airiti

わたしは強くそう感じる。それについて考えだすと、わたしは私自身が分割されていくような軋みを身の内に感じることになる。ミュウの分割が、わたしの分割として投影され、降りかかってくるみたいだ。とても切実に、選びようもなく（P236）」とすみれはミュウという他者との差異にいかに結びつき得るのかを改めて突き付けられているのである。

5. 終わりに

前述したように、『ノルウェイの森』でのレズビアン少女を皮切りに『スプートニクの恋人』に至ることにって、村上春樹は一連の女性同性愛関係の形を示してきた。では、『スプートニクの恋人』において描かれた女性同性愛関係がどのような境地を示しているか。そもそも『スプートニクの恋人』という作品が発表された時期、すなわち１９９０年前後というのは、日本における性的マイノリティをめぐる意識が大きく変容していった時期でもあった。例えば、堀川修平は１９８０年代後半から９０年にかけて、「“セクシュアル・マイノリティは「普通」である”というイメージを広く認知させるために、対国家、対報道／マスメディアに向けた運動がなされていった」と指摘した[10]。こうした運動によってマジョリティ／マイノリティという「境界線」が引き直されている。まず、１９９０年にＷＨＯ（世界保健機関）は「同性愛」を、『国際疾病分類（ICD）改訂第１０版』から削除し、それによって、「同性愛を変態・異常・不健全と見做すこれまでの見方（差別・偏見）は、一般社会においても見直し」が始まっている[11]。その後１９９３年にＷＨＯ（世界保健機関）が再び「同性愛はいかなる意味でも治療の対象とならない」と宣言し、日本でも１９９４年には厚生労働省がＷＨＯの見解を踏襲

[10] 堀川修平（2017）「セクシュアル・マイノリティに引かれる「境界線」」『総合人間学』第 11 号 P58

[11] 椎野信雄（2017）「Homosexuality をめぐって～ホモセクシュアルが病気でなくなるまで～」『文教大学国際学部紀要』第 27 巻 2 号 P44

airiti

することを表明した[12]。さらに、一九九九年の世界性科学学会会議(現在は「性の健康世界学会」と名称変更)で「性の権利宣言」が提唱されている。また、文壇でもセクシュアル・マイノリティを題材にした作品が発表され、またセクシュアル・マイノリティ当事者の書き手が活躍し、「セクシュアル・マイノリティの「可視」が広く行われている」[13]。それらをセジウィックの定義を使えば、要するにマイノリティの見解ではなく、普遍化の見解であると言える[14]。これらの時代背景を考えると、すみれという女性の恋愛を題材にこれまで存在を不可視化され、排除されてきた女性同性愛者の生を自己呈示することを描く『スプートニクの恋人』は、１９９０年代以降顕在化しはじめた性的マイノリティの普遍性が主張される同時代性に呼応していると言える。

しかし、女性同性愛関係の問題はこの作品以降姿を消している。近藤裕子は『スプートニクの恋人』を「レズビアニズムはむしろ、ヘテロセクシズムおよびその根源にある父権と戦うための原理として働いている」とした上で、この点について次のように指摘している。

> すみれが「あちら側」にゆきミュウを救い出せたとき、ふたりの閉ざされていたレズビアン関係は実現する。そしてそれは、「ぼく」とすみれとの異性関係にも新たな道を開くはずなのである。(中略) これ以降、村上のテクスト群からレズビアニズムは姿を消す。代わって登場するのは父殺しの息子をかばう性同一障害者の大島さんであり、淳平を父の呪いから救い出してくれる女性キリエである。彼女は風をまといながら、ビルの間の

[12] 前掲椎野信雄「Homosexuality をめぐって～ホモセクシュアルが病気でなくなるまで～」P44
[13] 同前掲堀川修平「セクシュアル・マイノリティに引かれる「境界線」」P59
[14] イヴ・コゾフスキー・セジウィック (1999)『クローゼットの認識論―セクシュアリティの２０世紀』青土社 P127

airiti

中空を自由にわたってゆく。＜父なるもの＞からの乗り越えには＜女性的なもの＞の力が大きく関わっていると考えられるが、この問題については稿を改めて論じる必要があろう[15]。

興味深い指摘だが、ここで注意を払いたいのは果たして「ふたりの閉ざされていたレズビアン関係は実現する」ことが出来るのかということである。『スプートニクの恋人』という作品は、女性の同性愛を描きつつも、単なるマジョリティ／マイノリティという物語に帰着するのでない。それは性愛という問題を題材に、決定的な差異を持ちながら、人間同士がいかに繋がり得るかという関係性の根源的な問いを示唆しているのである。つまり、男女の間では恋愛で性別の違う者が結ばれ、夫婦という新しい関係に入り、新しい物語が始まることが出来る。それに対して、「同性愛」といっても、すみれとミュウの間には決定的な差異が存在し、結局すみれの帰還が曖昧なまま、作品は閉じられている。それによって、こうした二人の関係性の先にあるものが何なのかは分からないままとなり、『スプートニクの恋人』は女性同性愛関係の混沌を示している。その意味で、『スプートニクの恋人』という作品で描かれている女性同性愛関係の混沌には、村上春樹が追及してきた女性同性愛関係の問題に対する一つの答えが呈示されていると見てとれるのではないだろうか。

テキスト

村上春樹（1999）『スプートニクの恋人』新潮社

＜付記＞

本稿は、2018 年 5 月淡江大学で開催された「「2018 年第 7 回村上

[15] 同前掲近藤裕子（2008）「すみれへ／すみれから―父権とレズビアニズム」P219

airiti

春樹国際シンポジウム」で口頭発表した内容に大幅に加筆し、訂正を行ったものである。

参考文献

宇佐美毅、千田洋幸編（2008)『村上春樹と一九八〇年代』おうふう
宇佐美毅、千田洋幸編（2012)『村上春樹と一九九〇年代』おうふう
宇佐美毅・千田洋幸編（2016)『村上春樹と二十一世紀』おうふう
風間孝、河口和也（2010)『同性愛と異性愛』岩波新書
小山静子、赤枝香奈子、今田絵里香編（2014)『セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会
杉浦郁子（2015)「「女性同性愛」言説をめぐる歴史的研究の展開と課題」『和光大学現代人間学部紀要』第 8 号
杉山裕紀（2017)「村上春樹『スプートニクの恋人』論―こちら/ あちらの問題を軸として―」『歴史文化社会論講座紀要』第 14 号
趙柱喜（2016)「村上春樹作品におけるセクシュアル・マイノリティ―表象研究」『２０１６年第５回村上春樹国際シンポジウム予稿集』致良出版社
日高佳紀（2013)「エキゾチズムの在処―村上春樹「スプートニクの恋人」のミュウ―」『奈良教育大学国文：研究と教育』第 36 号
堀江有里（2015)『レズビアン・アイデンティティーズ』洛北出版
森山至貴（2017)『LGBT を読みとく―クィア・スタディーズ入門』筑摩書房

airiti

※2019 年 4 月 30 日受領　2019 年 6 月 30 日審查通過